

平成29年度第3回おおいた子ども・子育て応援県民会議

日時：平成30年2月28日（水）

13：15～15：15

場所：大分県消費生活・男女共同参画プラザ
大会議室

【稲垣主査】 皆様こんにちは。本日の会議進行を務めます、こども未来課の稲垣です。よろしくお願ひします。本日の会議は公開で行うこととしており、一般の方の傍聴席・報道席を設けておりますことをご了承ください。また、議事録、資料につきましても、原則として全て県ホームページに掲載いたします。なお、お手元の配席図の右下にありますとおり、本日は小川委員、衣笠委員、古谷委員が所用のためご欠席です。坂本委員と吉岩委員は出席の予定ですが、少し遅れるそうです。よって、28名中23名の委員にご出席いただいております、定足数である過半数を満たしておりますことをご報告いたします。

それでは定刻になりましたので、ただ今から「平成29年度第3回おおいた子ども・子育て応援県民会議」を開会します。

始めに、広瀬知事よりご挨拶を申し上げます。

【広瀬知事】 皆さんこんにちは。今日はお忙しいところご出席いただきまして本当にありがとうございます。私はこれまでこの会議は皆勤だったのですけれども、実は前回どうしても行かなければならないことがありまして、初めて欠席をいたしまして大変失礼をいたしました。今日は改めてよろしくお願ひを申し上げます。

ご存知のとおり、今やはり少子高齢化、人口減少ということでも、子育ては、国もわれわれ県にとっても大変大事な、大変と言いますか、一番大事なテーマではないかと思ひます。国の方も「人づくり革命」を掲げて、子育ての応援を中心にいろいろしていこう、ということをお計画しているところであります。我々も、昨年皆さん方からいろいろと大事な意見をいただいて予算を組みましたけれども、その中でももちろん子ども子育てについては非常に重要な課題として取り組んできたところでございます。

1つは保育の問題でございまして、待機児童の解消ということで、市町村とも一緒になってやっているわけでございますけれども、当面の課題は「この4月1日の待機児童をゼロにしよう」ということでやっております。今日、大分市長さんにもお話を聞きましたけれども、大分市も随分頑張つて、どのぐらい潜在的と言いますか、保育需要が出てくるか

というところがまだ少し心配なところがありますというようなことを言っておりました。というわけで、待機児童の解消に向けて全力で頑張っているところです。

それからもう1つ、保育の段階を過ぎまして、今度は小学校に入った子どもたちの居場所づくりということで、放課後児童クラブ。こちらの方も実は保育ニーズと並行して随分人数が増えてきているらしく、こちらの方の整備も大事になってきているということです。これは今年度の、30年度の予算で相当強化をしていくということを掲げております。

それから、「子育てほっとクーポン」というものを今配っております。お子さんができたときに、お祝いと応援ということで1万円のクーポン券を贈らせていただいておりますけれども、これについてはもうこんなにめでたいことはないから、第2子については2万円にしよう、第3子については3万円にしよう、第4子については4万円にしようということではありませんが、第三子と同じではございますけれども、地域全体で祝福をし、また応援をしていこう、というようなことも考えているわけでございます。

それから、そうやって子育ての段階に至ることは大変良いのですけれども、そこまで至らなくて、若い男女の数が随分減ってきていると言いますか、県外に出て行っておられます。それから、残っておられる方も晩婚化傾向というようなことでございますので、とにかく、そのところに関してご希望のある方に対しては「出会いを応援しようじゃないか」ということで、出会いサポートセンターといったようなものも考えているところでございます。そのようにして、とにかく県内の少子高齢化の少子のところをできるだけカバーしていくようなやり方を考えているところでございます。

高齢化、それから社会増減対策等々につきましてもやっておりますけれども、そのことで皆さまのお力をお借りしながら、子育て満足度応援日本一の大分県をぜひつくっていきたいと思いますので引き続きよろしく申し上げます。ありがとうございました。

【稲垣主査】 続きまして、仲嶺会長からご挨拶いただきます。仲嶺会長お願いいたします。

【仲嶺会長】 皆さまこんにちは。昨日はちょっと暖かい陽気でございましたけれども、今日は一転して少し小雨の降るお天気の中お集まりいただきありがとうございます。

会議の開催にあたりまして一言ご挨拶申しあげます。前回の県民会議では、子どもの成長と子育てをみんなで支える意識づくりや地域における子育ての支援、子どもにとって安全・安心なまちづくりをテーマに意見交換を行いました。地域で顔の見える関係づくりの重要性や地域における子ども会や自治会の大切さ等さまざまな視点から、次世代育成支援

対策に関する活発なご意見をいただきました。

本日の会議では、平成 30 年度における次世代育成支援対策の主な取組につきまして事務局から説明を受けた後、大分子ども・子育て応援プランの推進につきまして、プランの基本施策に沿った 2 つのテーマで意見交換をしていきたいと思っております。一人一人の子どもが健やかに生まれ育つことができる社会となりますよう、皆さまとともに考え知恵を出し合っていきたいと思っております。

なお、本日は今年度で最後の会議になりますので、委員の皆さまにおかれましてはこれまでと同様活発なご議論をよろしくお願いいたします。

【稲垣主査】 それでは、以降の議事進行は議長であります仲嶺会長にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

【仲嶺会長】 それでは早速ではございますけれども、議事に入りたいと思っております。まず本日の議事の進め方につきまして事務局より説明をお願いいたします。

【二日市課長】 こども未来課長の二日市でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日の進め方についてご説明申し上げます。資料でお配りしております次第をご覧ください。まずこの後、議事（1）といたしまして行政説明「平成 30 年度の当初予算案における関連事業について」ご説明申し上げます。

その後、意見交換といたしまして、お配りしておりますおおい子ども・子育て応援プランの基本施策の 4 に当たります「きめ細かな対応が必要な子どもと親への支援」と、基本施策の 6 に当たります「子どもの生きる力をはぐくむ教育の推進」について意見交換をお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

【仲嶺会長】 大まかな時間配分といたしましては、まず（1）の行政説明が 15 分程度、残りの 90 分程度を意見交換ということで予定いたしております。15 時 15 分には閉会したいと思いますので円滑な運営にご協力方よろしくお願いいたします。

それでは議事の（1）、行政説明の「平成 30 年度の当初予算案における次世代育成支援対策関連主要事業」につきまして事務局より説明をお願いいたします。

【二日市課長】 引き続きまして、私からご説明を申し上げます。かけて説明させていただきま

まず、お配りしております資料のうち、カラーの印刷をしております資料 3 の「出生率（出生数）」の分析というものをご覧くださいませでしょうか。

ご存知のとおり、一昨年、平成 28 年度大分県の合計特殊出生率は 1.65 で、前年と比べ

ましても大きく飛躍いたしました。しかしながら、出生数は平成 28 年に 9,059 人とだんだん減ってきております。実は昭和 23 年ごろ、第一次ベビーブームのころに比べると 5 分の 1、昭和 48 年ごろの第二次ベビーブームに比べても 2 分の 1 という出生数でございます。合計特殊出生率が上がりましても、出生数自体はどんどん減ってきているという状況を考えまして、出生率をどうすれば回復できるだろうかという分析をした表でございます。影響する指標といたしましては、女性の人口、それから未婚率、初婚年齢、有配偶出生率となりまして、実は九州は全国の中で出生率が高いのですが、九州の中では大分があまり高くない、という状況をこのいくつかの数字でお示ししています。それに影響しますのは、若い女性が都会へ流出したり、あるいは出生そのものが少ないということ、結婚への意欲や出会いの機会などが減少しているということ、結婚を決心するにあたって経済的生活基盤の弱さがあるということ、仕事と家庭の両立の困難さ、育児負担の重さなどが背景としてあると考えられます。

そのため、出生率の上昇・増加のためには真ん中右にありますように、若い世代を中心に女性が増え、結婚したい男女が早い時期に希望が叶って結婚し、夫婦が複数の子を育てられる環境が整っているということが重要でございます。

その目的を達成するための主な対策といたしまして、一番右の段、これは平成 30 年度の私どもの事業に関わってくるのですが、「①出会いの機会創出」、先ほど知事からも申しあげました出会いサポートセンターの開設や、②の「経済的負担の軽減」につきましてはこれまでもやっておりました子ども医療費の助成などに加えて、国が幼児教育・保育の無償化を将来にあたって打ち出しているところです。③の「保育環境の整備」につきましては待機児童の解消はもちろんですが、放課後児童クラブの充実を進めてまいります。また④の「妊娠出産育児支援」につきましてははっとクーポンの拡充を計画しております。他にも、妊娠・出産知識の普及や、あるいは福祉保健部だけではなくて、他の部局とも協力して部局横断の総合力で出生数を伸ばしていきたいと考えているところです。

それでは恐縮ですが、本日の資料 1 と書いてあります行政説明資料の 1 ページ「子育て満足度日本一の実現に向けた 30 年度の取組」でございます。一番左の施策から、それに対する課題、30 年後の主な取組として挙げております。先ほどの分析の表でご説明申しあげましたものを合わせて書いております。「①結婚の希望が叶う社会づくり」、出会いサポートセンターの設置。それから主なものといたしまして、次の枠の中で、「①保育の受け皿の充実」「②保育士等の処遇改善と保育・幼児教育の質の向上」、これにつきましては保育現

場の働き方改革研究会を立ち上げ、関係団体にもご協力いただきながら、保育士さんが気持ち良く働き続けることができるような研究会を設置する予定でございます。また、保育士の修学資金や再就職準備金の貸付もこれまでの人数を倍増して取り組みたいと考えております。幼稚園教諭免許更新講習機会につきましては、この会議でも機会が少ないというご意見をいただいておりますので、別府大学短期大学部さま等にもご協力をいただきまして、今年度以上に機会を増やす見通しが立ったところでございます。病児保育につきましても昨年度ご意見を頂戴しまして、平成30年度中には30施設が運営される見通しとなりました。また、その下の枠のところ、ほっとクーポンにつきましては、第2子は2万円分、第3子以降は3万円分を市町村のご協力もいただいて、県内一斉に4月から始める予定でございます。③放課後児童クラブの拡充と運営強化につきましても、施設整備はもちろんです。すでにある建物の1室、あるいは何室かを借りてクラブを運営しようという場合の賃借料の補助、それから、高学年を中心にご要望があります夏休みなどの長期休暇だけ預かってほしい、というご要望にお応えする長期休暇の受入を拡大するときの支援なども予定しております。

他に、一番下の段にありますように、昨年、イクボス共同宣言を知事、大分市長、経済界代表の皆さんとしていただきました。これを契機として、イクボス企業・団体の推進等も引き続き進めてまいります。こども未来課関係は以上でございます。

【仲嶺会長】 ただ今の説明につきまして、ご質問等ございましたらご発言をお願いいたします。

よろしいでしょうか。それでは続いてお願いいたします。

【大戸課長】 こども・家庭支援課長の大戸と申します。それでは資料の2ページをお願いいたします。

私からは、本日のテーマの1つであります「きめ細かな対応が必要な子どもと親への支援」の関連でご説明をさせていただきます。座って説明させていただきます。

子どもの健康対策としての子どもの居場所づくりの推進についてでございます。まず背景でございますが、子どもの貧困率は13.9%、ひとり親の貧困率は50.8%と大変深刻な状況でございます。その右の子どもの貧困対策の推進に関する法律ですが、子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、貧困の状況にある子どもが健やかに育成される環境を整備すること等を目的として、平成26年1月に施行されたものです。

これを受けまして、県におきまして、「大分県子どもの貧困対策推進計画」を平成 28 年の 1 月に策定いたしました。具体的には、教育の支援の他、生活、保護者の就労、経済の支援の 4 つを柱にして、各分野の取組を進めているところでございます。

次に、中段の「現状・成果と課題」をご覧ください。計画策定方法ですが、まずは、「県事業として実施」の欄の「子どもの貧困対策推進体制整備事業」でございますけれども、見えない貧困、潜在的な貧困とも言われる子どもの貧困の早期発見、早期支援のため、子どもが多く時間を過ごす学校において、早期に子どもが抱える問題を発見できるよう教職員に対する研修や、要保護児童対策地域協議会、これは、虐待等の子どもの問題について関係機関が情報を共有し連携して対応するため、すべての市町村に一貫設置しているものですが、この協議会における、子どもの貧困にかかわる研修支援などを実施してきました。成果として、関係者等の子どもの貧困問題に関する意識の醸成が図られていること、そして教育委員会において、学校の中での気づきを各種の支援策につなげる役割を担うスクールソーシャルワーカーの配置を進め、全市町村に配置されたことなどがございます。課題として、学校では長期休暇等もあることから、学校以外にも潜在的な貧困を早期に発見する機会が必要と考えています。

次に、その右の、「ひとり親家庭の子ども居場所づくり」ですが、貧困率が 50%を超えるひとり親家庭を支援するために、モデル事業として、昨年度から 2 年間実施いたしました。国東市、中津市、日田市にある 3 カ所の社会福祉施設において、食事の提供や学習支援を行い、利用者が継続的な利用を希望するなど、好評を得たところであります。課題といたしまして、ひとり親家庭以外にも貧困等の問題を抱える子ども・家庭への支援が求められています。その右にあります、「ボランティアとして実施」の欄でございます。この間、県内では NPO 法人や地域の有志など、さまざまな運営主体による子ども食堂の取組が広がり、現在 31 施設が開設されています。開所日や利用対象者など運営方法はそれぞれ異なっていますが、食事の提供の他、学習支援やレクレーションに取り組むところも多く、子どもの居場所として機能しています。運営の課題として、学習支援等のボランティア人材の確保が困難であると伺っています。今後、子ども食堂は、居場所としての機能の他、子どもの問題の早期発見の場としての役割も期待されることから、未設置の市町村を始め、さらなる拡大が必要と考えています。このため、30 年度は、子ども食堂など、子どもの居場所の設置の促進に取り組めます。

一番下、「今後の取組」の一番右側をご覧ください。具体的な取組でございますが、まず、

①のとおり、子どもの居場所の新規立ち上げや、既存の施設が機能を強化するため、新たに学習支援、レクリエーションに取り組む際に要する経費に対して補助を行います。

さらに、②のとおり、運営を支援するため、学習ボランティアの派遣調整や、開設希望者への相談支援、運営者等を対象とした研修を実施いたします。このような取組を通じまして、子どもの居場所を増やすとともに、引き続き関係機関の情報共有、連携を進め、貧困による子どもの問題の早期発見、早期支援のさらなる強化を図ってまいります。説明は以上でございます。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。それでは、ただ今の点の説明につきましてご質問等ございましたらご発言お願いいたします。

【重石委員】 大分市の重石でございます。よろしく申し上げます。大分市におきましても、子どもの貧困対策というのはやはり重要だというふうに認識しておりまして、これから具体的に取組んでいく予定にしております。居場所づくりについては、本市でも支援を始めているところなのですが、貧困家庭ということを出しての支援というのはなかなか難しいところがございますので、子どもの居場所づくりとしましても、ひとり親家庭につきましても、家庭に親御さんがいないというところで、学童保育が終わった後、居場所として提供するというのをモデル事業として始めたところなのです。貧困家庭の支援と言っても、それを表向きになかなか出せないところが非常に悩みになっております。

それともう1点が、実際の貧困の状況というのが把握がなかなか難しく、実態調査というのをどういった内容でやるかも課題ですけれどもやりたいというふうに考えているのですが、大分県で、県下の市町村、いろいろなご事情の違いはあると思いますけれども、県がリードして、そういった県下の実態調査というのをやっていただけると本当にありがたいなと思っております。沖縄県で以前やられたということで、それがすごく役に立っているというようなことも新聞報道で見ましたので、ぜひそういったところを県にリードしていただけたら市町村としてはありがたいなというふうに思っております。よろしく申し上げます。

【仲嶺会長】 今の意見につきまして、事務局、何かございますでしょうか。

【大戸課長】 はい、ありがとうございます。まず貧困対策として、家庭を限定した取組が難しいというのはご指摘のとおりだろうと思います。現在取り組まれている子ども食堂についても、多くのところがそういった限定をせずに、地域の子どもの受け入れているという実態でございます。ただ、必然的に貧困の子もその中に入っているのかなというふう

に考えておりました、先ほどご説明したとおり、その中から貧困状態にある子どもを見つけていろいろな政策につなげることができたらというふうに子どもは考えてございます。

それから実態調査でございます。この計画を策定するときに、この県民会議でもご意見を伺ったところでございますが、その他、県内の就学支援を受けている家庭へのアンケート調査など、それから、児童養護施設の職員の方の意見聴取など取り組んだところでございます。今後どのような調査をするか、地域の方、市町村の方とご相談しながら考えていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

【仲嶺会長】 その他ご質問等ございますでしょうか。よろしいですか。それでは、およそ15時5分までフリートークの時間をいただいております。「おおい子ども・子育て応援プラン」の推進につきまして、プラン第3期計画で定められています基本政策をテーマにご協議いただきたいと思います。まず始めに、テーマ1「きめ細かな対応が必要な子どもと親への支援」でございます。お手元の資料を参考になさっても結構ですし、皆さま方から事前にさまざまなご意見を聞いておりますので、それに基づいてのご発言をいただいても結構でございます。第一声のご発言、特にありませんか。今、子どもの居場所づくりの推進についてというところでも、さまざまな成果や課題、それから今後の取組等の説明がございましたけれども、そのところは非常に関連しているのかなと思っておりますけれども。

実は最近、私は栄養士会関係の冊子で拝見したのですが、子ども食堂の調査を栄養士関係の方がなさったときに、給食がある日とない日で子どもたちへの栄養の摂取の割合が違うのだとの結果が出ているというような内容でした。子ども食堂などを運営するにあたってのそういうような知見というのは何かございますでしょうか。私が質問させていただいて申し訳ないのですけれども。

【大戸課長】 はい、ありがとうございます。

実はそういったデータは今、体系的に持ち合わせてございません。皆さんそれぞれの地域で実情に応じて、対象者も小学生だけではなくて高校生も含めたり、あるいは家族の方も入れたりといった状況でございます。これから制度の拡大を図っていく中で、今ご指摘があったようなデータを収集して、子ども食堂の運営者の皆さんを集めた研修などの際に提供していけたらというふうに考えます。

ありがとうございました。

【仲嶺会長】 その他、ご意見等はありませんか。

【吉岩委員】 大分県福祉協議会の吉岩と申します。子ども食堂に関連いたしまして、少し県社協での取組もご説明させていただきたいと思います。

大分県社会福祉協議会では平成 28 年度の昨年度より地域福祉部の中に子ども支援センターという部署を設置いたしまして、その中で今いろいろな方のお話があったとおり、子ども食堂の推進ということを取り組んできたところでございます。

まずそれで、昨年度どういったことをやってきたかというところになりますが、子ども食堂の推進のために何が必要か、最初の設置から実施、そして進めていく中でどういったことをノウハウとしてやっていったらいいかというところを、まず自分たちが実践してみようということになりました。そして期間限定ではありましたが、もう 2 年前になるのですが夏休みである 8 月に毎週 1 回ではありましたが、子ども食堂を県社協の会館の方で 1 ヶ月間、モデル事業という形で自分たちで立ち上げから推進までをやってみました。

そしてそこで経験したこと、最初の準備から何をまずやっていったらいいか、関係作りなど、そういったものをマニュアルにまとめまして、28 年度に配布を行ったところでございます。それと平行しまして、実際に今、子ども食堂を推進しているときに、平成 28 年度時点では把握している所で 10 カ所ちょっとぐらいあったところで、いったん皆さんで集まっての連絡協議会というものを開きまして、皆さんと情報共有の場を持ちました。私も 28 年度は関わっていたのですが、ちょっと今年度から別の事業になっておりまして、最新の状況となると少し把握しかねるところもあるのですが、今年度も引き続き、新しいところも加えながら子ども食堂の研究協議会という形で、皆さんとの情報共有などを行っているところでございます。

あとは県社協ではフードバンク事業というものを行っております。例えば、子ども食堂を推進している団体等にお米などのいろいろな食材を提供する中で、子ども食堂の運営を側面的に支援していくという形を今取っている状況でございます。

先ほど市や県の方からもお話があったとおりですが、食堂という言葉が付くだけで、子ども食堂という言葉が有名になってきたこともありまして、私たちもモデル事業をする際に、最初は食堂という名前を付けていました。しかし親御さんにとっては食堂という言葉がある時点で、そういった貧困対策の子ども食堂ではないのか、というところで、やはり本当に利用したい方が行きにくいという事情を PTA 等からのご意見をいただいたところがありましたので、あえて私たちは食堂という言葉を使わずに実施をしてきたところでございます。

私たちもやはりご意見があったとおり、結果的には貧困対策を目指している部分はあるのですが、そういうことではなく居場所作りという中でいろいろな人が来られる中に、そういう本当困っている方が来たときには支援をしてあげられるようにという考え方は同じでございます。実際にモデル事業をしている中でちょっと運営上の関係で事前予約制でやっていたのですが、そういった困っている方が飛び込みで「ごはん食べに行っていないですか」というお話があったりしました。

自分たちのモデル事業の場合は学校と共同して連絡を取り合って行った中で、学校の方からも「こういう人を連れて行ってあげたいのだけど」というようなお話をいただいたりという中でご意見をいただいたこともございました。そういったところにやはり配慮する中では、貧困対策というところを打ち出すものの難しさというところも、私たちも感じたところがございます。

ですので、資料2の方に少し書かせていただいたのですが、食育であったり貧困対策、そういったところもあるのですが、やはりそういった学習支援であったりレクリエーションをする中で、今、特になかなか機会も減っています。同じ世代だけではない、同じ小学校でも1年生から6年生までいろいろな異年代との交流であったり、ボランティアさんと一緒に協働する中で地域住民との関わり、そういったところを通して実際に子どもたちの感想でもあったのですが、日ごろの家の中だけでは得られない体験や学びを、皆で共有することがひいては子どもたちの貧困対策というところへ直接つながるかは難しいとは思っています。しかし今後の子どもたちの成長の中では大きな影響・力になるのではないかと、私たちも実際に取り組んでいく中で思ったところがございます。

ちょっと長々と説明を聞いていただきましたが、私たちも引き続き子ども食堂の推進には県と協働しながら、いろいろなところの団体とも協働しながらやっていけたら、というふうに思っております。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。

今のことに関連いたしましても結構ですし、また関連しなくても結構なのですけれども、今は社会福祉協議会さんの事業の展開などをご説明いただいたと思うのですけれども、今の吉岩委員のこの事例に対して事務局からは何かございますでしょうか。

それでは引き続きご意見をいただきたいと思います。では内田委員お願いいたします。

【内田委員】 私は大分市の東部の方で民生委員、児童委員を務めております。きめ細かな対応が必要な子どもと親への対応と、この言葉を見たときにきめ細かな対応といっても、

どの家庭にどのような問題があるのかというのはなかなか把握できない状況です。普段小学校と中学校を定期的に訪問することがあるのですが、校長先生とかに聞きますと「どの子が朝ごはんを食べて来られないのかとか、どの程度貧しいかとか。そういうことは子どもたちの顔を見たり、服装を見たりしても今はほとんど分かりません」と言われます。私たちの地域におきましても、家の様子や子どもの姿を見ていても、どの程度家庭に問題があるのかというのはつかめない状況です。それで私たちは民生委員として小学校や中学校を毎年訪問しています。中学校の場合は学校の都合もありますから、7月になったり8月になったりしますが、中学校の場合は3校区一緒にして、主任児童委員と一緒に、文書を出してもらって皆できちんと訪問をして、そこで「子どもの状況、地域の私たちにできることがもしあれば、何かお話ししてほしい」ということ申し入れます。

もう10年ぐらいになるのですが、最初のころは学校もなかなか子どものことは教えてくれません。それでも今は「あなたの校区には何という名前の子どもが、今こういう状況で」というのをだんだん学校の方も出してくれるようになりまして。そして名前が分かれば私たちも普段の生活というか、見る目も変わってきますし、関わり方もそこから見えていくようになります。そういった学校と私たちとの信頼関係と言いますか、そういう大事な部分がやはりあると思うのですが、そこで名前を聞き、教育も大事にしながら、私たちも職務と守秘義務等を守りながら、どのように関わっていったらいいかということ相談したりして、うまくいった例もありました。そういうときには家庭の様子も分かりますし、保護者の方とも非常に深く話ができて良かった例もあります。

最近の私の経験では中学1年生の女の子が、小学校の時はそんなことはなかったのですが、不登校気味になりまして。家の方に「今日登校していないか」と電話をしたら「いや、もうとっくに外出しているんですけど」と言われて、学校で職員が駆け回って探したけれどもなかなか見つからない。それで見つかるまでと思って探していたら、1回目は家の裏側にしゃがんでいて、2回目の時には部屋の中で座っていたとか、そういうような感じのことが分かってきて。そういうことを学年部の先生が伝えてくれますと、私たちの対応の仕方もまたそこから変わってきて、お母さんとの話し合いを重ねていくうちに、生活面で困ってしまっていたので就学援助の話だったと思います。就学援助がうまく行って両親が「先生方は一生懸命応援してくれている」ということで、それが子どもに伝わったかどうかは分かりませんが、今ではごく普通に小学校の時と同じように登校できて同じように生活できるようになったというような成功例があります。私たちもああいうこと

をやって良かった、ということを通し1つの例を通して喜んでいくところです。

その私たちの存在を知ってもらうために地区の子ども会というものが校区にあります。子ども会の時に市がつくってくれたクリアファイル、これを私はよく使うのですけれども。子ども家庭支援センターというこういうピンクのクリアファイルをいただいたものです。その中には外回りも子どもの困りごとを相談する機関がいっぱい書いてあります。家からすぐ電話ができるようにこういう所がありますと一緒に見ながら伝えていきます。

その中で今度は私たちが伝えたいことですね。「1人で心配事や悩み事を抱えていませんか」とか「民生委員とはこういう者です。いつでもおられます」とか「こんな相談と一緒に考えて私たちがつなぎ役になります」というようなことです。大分の合同新聞「ともしび」というものがありまして、こういうものの中でちょっとこれは投げかけると面白いかなというものをピックアップして、子育てサロンの方もやっていますが、こういうようなものを持って、その子ども会の会場に行って、私たちの顔を覚えてもらっています。

いろいろあるのですけれども、その自分の区域の子ども会、全部行くわけではないですけれども、自分の区域の子ども会に行って、「私たちはここにいますよ」と、「もし何か困ったことがあったらいつでも声をかけてください」というのを、もう10年ぐらい続けてきました。そうしたら年に1、2件はですね、結構学校に言うよりも、他に相談するよりもまず民生委員さんに話をしようとかいうような形で相談が入ってくるので、少しは何か力になれているのかなと思うのです。

それでもやはり就業の問題、子どもの問題、そういうのはつかみにくい状況でいますので、先生方にも信頼を置きながら何とかしたいということ、私たちはPRをしながら子どもの問題を把握することに勤めているという状況でございます。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。

今、民生委員さんとしての活動の内容をご説明いただいたと思うのですけれども。子ども会に顔を出す、それから小中の先生方との信頼関係によって、多少対応の必要な子どもさんの情報を得ることができるというようなお話があったと思うのですけれども。

そういう子どもの貧困ということだけではなく、先ほどの内田委員のお話の中にありましたような、不登校気味のお子さんを探して、そして学校に行くようにできたというようなお話もありましたので、不登校・引きこもり辺りのところで何かご意見がある方はおられませんでしょうか。

【岡田副会長】 すみません、私のテーマ1に関して思っていることは、資料2の3ページに書いていただいているのですが。1つ目にまず私たちは今なかなか地域全体像が把握できていないということがあるので、県等の支援事業の中でできているということで、それに対して周りにはまだそれをうまく利用できていない人もいる、全体の中ではどれぐらいできているのかというような見取り図等を、皆で意識して作りながらやっていく必要があるかなと思っています。

2つ目にいろいろな児童に共通するのですけれど、利用者が単なる利用者としてお客さんのままでいるのではなくて、そこから自分が動き出して、自立したりネットワークにつながっていったりする部分で、主体的に動けるとか能動的にどんなふうに行く、というようなことが必要と思っております。

子ども食堂に関して言うと、そこでご飯が食べられることはすごく大事ですが、家でも簡単な料理ができて、子どもが自分で調理をする技術を持つようになる。それから、そういう子どもを見ていたら「ちょっとやっぱり料理作ってやらんといかん」と親が変わる、これは難しい話ですが、親のその態度や生活のスタイルが変わる。さらに言うと、子ども食堂をお世話している方、一生懸命されていると思いますが、その方自身の学びや成長の部分はどうつくっていくのかということも含めて、もう少し欲張って、いろいろ組み合わせながら取り組んでいけると良いのではと思っています。

それから、3点目ですが、施策や事業が他の事業の関連している部分と、うまくつながるようにすることと合わせて、行政の中だけでなく、地域でいろいろな取組をしている団体とうまくつなげながら行っていく必要があると思っております、不登校、引きこもりはその先に就労支援などの問題とつながるのだろうと思いますし、その時に「つながりを切らさない」ということが、重要と思っております。

以前、私、国の方の関係の施設の調査で、高知県を視察させていただいたときに、高校を中退するときに学校との関係が悪化していて、中退した後はプツッと切れてしまう。そこから本人もしくは保護者の方が相談に来てくれないと、サポートステーションからはなかなか働きかけられないという話を聞きましたら、高知県では、条例を改正して高校の方から、個人情報サポートステーションなどに提供できるといった仕組みにされたそうです。そのようにしてどこかの時点で、中退したり進学しなかったことで、社会的なつながりをなくしてしまわないように、切れ目のない支援ができることを考えていくことが、い

ろいろな配慮の必要なお子さんをきちんと支援していくために、必要ではないかと考えております。以上です。

【仲嶺会長】 ただ今の、3つ目のところにつきましては、事務局の方から何かございますでしょうか。中学、高校大学等を中退して、社会とのつながりをなくしてしまっているような者たちに対してのネットワーク。それが就業支援等までつながるような取組だというようにお話だったと思います。

【宗岡課長】 県の教育委員会の学校安全・安心支援課の課長の宗岡といいます。お世話になります。今委員からご指摘がありました、高知県の関わりですけれども、高知県は私どもも視察をしております、条例改正というよりも、事業として条例の個人情報の部分を、どういうふうに情報を伝えるかというところに腐心したというふうに聞いております。

実は、県の教育委員会の私どもとしましても、中学校卒業時、それから高校の中退と卒業時、この時に進路が確定できずに、いわゆる社会とつながりが途絶えてしまうことがあってはならないということで、まずは、中学校卒業時の段階で、不登校の子どもを中心に、進路がはっきりしていない子どもさんの個人情報をうちの方で管理する必要があるということで、市町村と実は年度当初から、どういう形があるかを検討しているところです。

それから、高校の方につきましても、個々の個人情報はうちの方でも取れるのですが、それをどのように活用していくかということについては、これは保護者や本人の同意が必要だろうということと、同意を取るうえではその子どもたちを社会的自立につなげていくために、その情報はどのように今後活用していくのかということをしかり整備をして、保護者や本人にご説明をしないと、これもなかなか同意はいただけないだろうと、そのところを、どう成果が実らせるのだろうかというふうな話をしているところです。

いずれにしても、そういった子どもたちが社会とつながらないと、社会に窓口がないというようなことでは埋められないということ、そこは強調しながら考えていけたら良いと思っております。

【森高課長】 補足させていただきます。私学振興・青少年課長の森高と申します。実は今、教育委員会の方ともそこは課題と考えておまして、宗岡から申しあげましたように、こういった連携が取れるかというところは話をしているところでございます。その中で、先ほど民生児童委員さんからお話がございましたけれども、私どもの方は民生児童委員さんのお力もお借りして、1人でも多くの引きこもりの方々への支援となるように、大分市に青少年の自立支援センターを設置しております。そちらで引きこもりのご相談も承って

おります。おっしゃるとおり、そこにつなげることがなかなか難しい状況でございますので、民生児童委員さんにもお力をお借りして、地区の中でそういう方がいらっしゃるとい
う情報がございましたら、ぜひセンターの方に、ご本人さんはなかなか無理かもしれませ
んが、親御さんに「ご相談してみたら」と一言言っていただくとありがたいと思ってお
ります。いずれにしても、地域全体で支援していかなければいけないと思っておりますの
で、どうぞよろしく願いいたします。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。岡田委員の中に、子どもにクッキングを教えて、
それを持ち帰らせたらどうかとご提案もございましたけれども、すごく良いアイデアだな
と思います。

先ほどお話に出てきた沖縄の貧困問題の取組は、他県と違って若年層の出産による貧困
が大きいですから、結局家庭に行って料理を教えるとか、単なる炒め物ぐらいも「こんな
にすればいいの」というような若い方、親御さんが若いので、その程度でも「そうだった
んだ」ということらしいです。

ただ、それについては家庭の訪問は、ボランティアの方が行っているとのことですので、
それですぐ良くなるかという、やはり3年くらいかかるといったお話は聞いております。
なかなかそういうことの改善は時間がかかるのだと思っておりますが、1つには自分たちの
スキルを持たせた方がよいのではないかというのは、画期的なご意見と思っておりますので、取
り組むときにまたご相談します。

それと、テーマ①につきましては、まだ他に児童福祉等の話もございまして、ご意見
をいただいている富高委員。

【富高委員】 佐伯市の富高と申します。実は、私が言いたかった子ども食堂について岡
田副会長さんからご意見をいただきました。私も親子クッキングを考えていましたので、
本当に私が思ったようなことを考えてくださっていて嬉しいと思いながら聞いておりました。
30年度の県予算において、本当に子どもたちの思いの詰まった計画を立ててくださっ
ていますが、私は2点について県の方のお考えをお聞きしたいことがあります。

まず1点目は、先ほどからお話に出ている子ども食堂についてです。先ほど県社協の吉
岩さんが「子どもたちの居場所の1つとして」という言い方をされました。私もこれから
の子ども食堂の展望を県の方がどういうふうにご考えられているのかということ。最初はと
うか、子どもの貧困対策の1つで始まっていると思いますが、私の住む佐伯市がまだ子
ども食堂をしておらず、今研修会を開いたり、あちこちのその積み重ねをしているところ

です。ただ私はいつも思うに、子ども食堂のこれからの展望のようなものが見えないのです。そこで、視察に行ってお話を聞くと、どの方にも門戸を広げているそうです。「いろいろなお子さんが食べに来きますよ」「一緒に遊んだりしてとても良い居場所になっていて、高齢者の方も来ます」とかいうそういうお話を聞くと地域の居場所としてとても良いなというふうに思います。ただそれがそのまま子どもの貧困の対策にダイレクトにつながっていくのかと言うと、そこがこれからの展望としてどうなのでしょう。私もその中で、もういよいよ親子クッキングで親も出てきて一緒に簡単な料理をしようとか、それからもう地域食堂としてしまって地域の食べられないお年寄りも、料理を作るのが少し苦になった高齢者も、もうみんなのものとして地域食堂みたいな形にしていくのか。本当に子ども一人一人の貧困の対策だとすれば、私はもっとピンポイントにした方がいいのではないかと思います。本当に食べてきていない子どもがいます。私は2つの児童クラブを「つるおか子どもの家」というところでやっていて106人おりますが、夏休みとかの長期の休みになると、子どもたちに朝来たときに聞いてみると、そのうちの20人近くが朝ご飯を食べてきておりません。それで、その中にはお母さんがどうしても食べさせるのが無理だろうなという状況もあります。

それで児童クラブの方は10時のおやつがおにぎりになって、そうめんになって。何十年か前は本当に簡単なクッキーだったのが、今はうちの児童クラブでは食べてきていない子どもが多いということで、どんどん重めのおやつになっています。

でもそれでそこで賄えれば、そういうやり方をしていく児童クラブになっていかなければいけないのではないかなと思いますし、おうちの人と話すときに、例えば、朝に飴かガムしか食べて来ていないお子さんも見えています。それで、ママと話すときに「この後、番匠川で泳ぐから、おにぎりを食べとったらもっと泳ぐ力が出るね。この人泳ぐのが大好きやから途中でばてないように、明日はちっちゃなおにぎりにでもいいけん、飴からおにぎりになるといいね」とかいう話をする、次の日はコンビニのおにぎりを持っていたりします。「コンビニのおにぎりを買うより、家でご飯を余計炊いて夜の分までおにぎりしときよ」とか、そういう話をしながらおうちでの白いご飯を今度おにぎりにして食べて来たりする。本当に困って本当に食べられていない子どもたちは、やっぱり一人一人にその子の名前を呼んで支援する人との信頼関係を積みながら、そのところを「一緒に乗り越えようや」と言わないと、子どもが食べるというところでは子ども食堂はとても大事だと思います。でも、本当に貧困というところだけ考えるのであれば、「子ども食堂のこれからの展望がど

うなのだろうか」というところを今日お聞かせ願いたいと思いますし、食は子どもたちのそのまま命につながるものですから、親が確保して、親が自覚して、自分の子どもの命を守るために食を提供するという気持ちを持ってもらわないと、本当の意味での子どもの幸せは来ないのではないかと思います。

食こそが親から離してはいけません。お母さんが子どもを産み落としたときにまず一番におっぱいをふくませるじゃないですか。そここのところから始まっているので、そういうふう親子で食を考えていくというふうにはなるといいなという。

もう1点は児童発達支援センターについてです。年々、支援を必要とする子どもが増えています。その中で児童発達支援センターというのは県下にもたくさん頑張っていて活動しているんですが、例えばうちの佐伯市を見ると、児童発達支援センターつぼみというところはもう定員が満杯です。

一昨日、佐伯市の子ども・子育て会議がありましたので、そこで散々言ったのですが、佐伯市の支援を必要とするお困りの親子さんが津久見に行ったり、それから別府や大分の発達支援センターに入ったりしている状況です。ですから、ぜひそれぞれの市町村に行った児童発達支援センターの需要がとても多くなっていると思うのです。そここのところをもう一歩入っていただいて、県の方からもたくさん支援をしていただくとありがたいなというふうに思います。

それで、その子たちが保育園や幼稚園や小学校や、小学校の後の児童クラブ、いろんなところで一緒に育っていくので、先ほど県の中でも「児童クラブの充実」というふうに言ってらっしゃいましたが、児童クラブの中でも支援を必要とする子どもと一緒に過ごすスキルがとてもやっぱり大事になってきていますので、ますますここら辺も充実をさせていただければと思います。よろしくお願いします。

【仲嶺会長】 事務局の方からよろしいでしょうか。

【大戸課長】 はい、ありがとうございます。子ども食堂についていろんなご意見をいただきました。

まず子ども食堂は、そもそもスタートとしては、やはり経済的な困窮家庭で、食べていない子に食事を提供するとか、あるいは子どもだけで食事をして、孤食の子どもたちのための輪としてスタートをしたというふうに認識をしております。ただ、先ほど皆さまからお話があったように、困窮家庭に限定すると、なかなかそのこと自体が参加しづらいということがあって、参加者の門戸を広げながら取組が広がってきたというのが現状かなとい

うふうに考えているところです。われわれ県としてと言いますか、私が今考えているところでございますけれども、今、県が31カ所の子ども食堂を運営者の皆さまが自分たちのお考えとか、地域のニーズとか、あるいは確保できる、協力していただける人の数であるとか、そういったことを背景にできることをやってくださっているというのが現状かなというふうに考えています。

ご指摘のあったピンポイントの支援については、現状等を踏まえると、少し子ども食堂に期待するのが難しい面もあるのかなというふうに思っています。ただ、利用者の中に食事が取れていない人がいればそういった情報をこれから、その家庭を支援するために何かできるかというのを関係機関で取り組んでいくような仕組みができないかなというのが、私が考えているところです。

それから料理教室について、ご意見ありがとうございます。実は今の子ども食堂の中にも子ども料理教室とか、親子料理教室などの取組をいただいているところがあります。数は少ないのですが、吉岩委員からお話があったように、去年から取り組んでいるのですが、子ども食堂の皆さんの連絡会をつくって、その場でそういった取組のノウハウであるとか、有効性をご紹介していただいたりして、なるべく広げていくような取組を進めたいというふうに考えているところでございます。

【長谷尾部長】 発達障がいのお話でございましたので、少し申し上げますと、来年度の新規事業を1つつくっております。富高委員がおっしゃったように「待ち時間が結構あって大変だ」というふうに言ったのですが、その根本的なところで、発達障がい児の支援コーディネーターの配置をいたしまして、その方にコーディネートを頼むことを1つ。それから小児科医の先生たちに発達障がいの対応向上研修をしてもらって、結構来るのですが、そういうところをもうちょっとしっかり提案して、そういう人たちの場にしていただければなという形です。

それとやはり保護者の方が「子どもの関わり方が難しいんだ」というふうによく聞きますので、そういった関わり方の研修などを複数回行っていただきたいと思います。また、これまでペアレント・メンターと言いますか、そういった経験者たちが手助けをするというか、こういった場面もしっかりつくっていきなと思っております。

今日の資料にたまたま掲載はしていませんけれども、来年度そういった事業をして、障害福祉課の方でございましてもしっかりやっていきたいと思っております。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。富高委員よろしいでしょうか。

すみません、私の方からちょっと付け加えさせていただきたいのですが、ただ今の発達の方の障がいがあるお子さんの場合の保護者の検診で関わり方を教えたりとかというようなお話をしておられたのですけれども、実は、発達障がいがあるお子さんの保護者の方というのはおじいちゃん、おばあちゃんと同居している場合とか、それからおじいちゃん、おばあちゃんに子どもさんを預ける場合があるのです。その時におじいちゃん、おばあちゃんはお子さんの障がいのことについて詳しくないので、関わり方について自分の親と摩擦が起きているということもお聞きしています。

ですから、保護者だけではなくて、おじいちゃん、おばあちゃんにも対象を広げていただけると、家族の方で「研修を受けられてください」って言うのもどうかなというがあるので、そのくらい広げていただけるともっといいのかなというふうに感じております。周囲に何件かこのようなケースがあるので、お話させていただきました。

一応、今、テーマ1で、たくさんお話いただいたのですけれども、時間が少なくなってきましたので、次のテーマの2「子どもの生きる力を育む教育の推進」ということにつつまして、意見交換を行なっていただきたいというふうに思います。このことにつつましては、いろいろと皆さん事前のご意見等ありますけど、事前のご意見等にとらわれずにこういうことの実行をしている、あるいは、こういうことの実行が行われているのかというようなご質問等がございましたら、ぜひご意見お願いいたします。

【坂本委員】 おやじネットワークの坂本です。僕はたまたま去年の9月から来月まで、日出町の小中学校のICT支援に関わってまして、学校の中とか教育現場を管理したいということで、このプログラミング教育が出てきたのですけれども、これは1つのいいチャンスで、例えば学級で授業に集中していないと教室を飛び出したりしてしまう子、こういう子らにiPadでYouTubeとかを使うと着席するのです。そして端末が少ないので6人1班でやっているのですが、そうするとその6人の中で、協調性を持って行って、授業も騒がないのです。一応こうしたデバイスをうまく使うといろんな意味でいいかなと思っています。それと、貧困と学習格差の問題でして、よく言われているのがそのうちアフリカの子どもが日本の子どもより学力上がるかと言われています。なぜかという、インターネット関係が発達してきて、その気になればどんどん学習できるわけですよね。では大分は、日本はどうかという、インターネット環境は整ってはいるのですけれども、子どもたちがすぐ見られるかというとなかなか見られないのです。学校の現場も当然、Wi-Fiはフリーではないですから、そういった意味で、できれば僕は、放課後の児童館とかをWi-Fi

フリーにして、インターネットで見つけるだけやってみよう。それと前提は自分の知りたい情報を検索する技術、子どもは知りません。1つの単語で探そうとするのです。より深く知ろうと思ったらスペース空けて単語をいくつか並べるとどんどん奥が広がるのです。そうやって自己学習から入ると意外とゲームしないのです。だから一応そういう形でできたらいいなと思います。

それとと思ったのが、今、小中学校のパソコン教室のパソコンはもう限界に来ているのです。もう5、6年経っていてちょうど買い替え時です。それと買い替えた古いやつを放課後の児童クラブとかに少しもらってきて、県とかけ合って教育委員会の方にインターネット環境だけ少し面倒みてもらえば、そうすればちょっと違う感じも出てくるのではないかと思います。たまにそこで地域の人がボランティアで、仕事でエンジニアやっているような人でも、「ボランティアで教えに行っちゃる」とか、それでちょっとした実用的なレベルに興味がある子は教えてあげるとか。実際に高校時代の友達のお子さんが今、滝尾の方で小学生なのですが、学校に行っていないのです。でも家でずっとプログラミングをしているのです。それがいいのか、悪いのかは別として、これから人はいろいろな才能があるのだというところを認めていく時代になると思うので、プログラミング教育がこれからどんどん入っていくうえで、いいきっかけだという感じで捉えたら面白いのではないかと思います。

それと、初めて見た予算書ですが素晴らしいですね。本当にいろいろな事業があって、結構予算があるのです。だから、うまいことこれを生かしてやればいろいろな効果が反映されるということがあるので素晴らしいと思います。

【仲嶺会長】 それではネット社会というところで、ご意見を述べられている方が何人かおられますけれども、「ネット社会と子ども」ということで中村委員お願いいたします。

【中村委員】 PTA 連合会の母親部門代表の中村です。私が個人的には、そのご意見には大変反対しております。本当にインターネット等がいろいろな可能性を広げてくれるというのは、もちろんあると思うのですけれども、ただそれを子どもに環境として与えてしまったときに、いわゆるこちらが目指す理想的な部分でも進んで欲しくないゲームだったり、いろいろな必要のない情報の収集だったり、書き込み等も含めてというところのマイナス面の方がどうしても親としては気になってしまうものですから。

先ほど子ども食堂のお話もありましたけれども、やはりこちらが狙っている対象の方だけを、その方だけで100%にするのはたぶん無理だと思うのです。もし子ども食堂をして

本当の対象の方が気負わなかったり、恥ずかしい思いをしないようにぼかしてというか、全体に広げれば、本当は来なくてもいい方も含めて受け入れなければいけなくなってしまふということがあると思います。本当に今のお話では、広げればやってほしくないことも含めてインターネット環境に子どもを晒すというようなことになってしまうのではないかとと思うところがあって、ちょっとまだ小学生、中学生とか放課後児童クラブみたいな場所に通うような子どもたちに正しい判断ができるかなというのが、疑問を抱くところです。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。そのようなことに関連して、神田委員が保護者間のLINEのことを考えておられるのでいいですか。

【神田委員】 保育連合会の神田です。今日はよろしくお願ひいたします。随分前、この会議で子どもたちのLINEの話を少しさせていただきまして、子どもたちが本当にグループLINEをつくって中傷することで子どもが学校に行けなくなったり、無気力になったりすることをお話させていただきました。今回書かせていただいたのは、保護者間のLINEグループの取り扱いです。今、個人情報強く言われるようになりまして、うちの子はもう高校生なのですが、その子が小学校6年くらいから保護者間の連絡網というものがなくなりました。それでいろいろな電話の事例とかがあってそういうことがあったみたいなのですが、それがあからかとは分からないですけれども、学校のクラスの保護者間でグループLINEをつくってそれで連絡をやり取りするということが、今、多くなっているようです。それだけだったらいいのですけれども、担任の先生の書き込みを少ししたことでも「うちの子もそう言いよった」「こう言いよった」それで、結局担任の先生の悪口が30人なら30人が書き込むようになって、子どもがそれをどこからともなく聞きつけて「ママどうなってるの」と。そして「あの先生はこうだった。ああだって」という話で、家庭の中で子どもに先生の悪口を言ったりとかで、だんだん子どもたちが先生の方を見なくなって授業にもならなくて、親は親で「あの先生の話は聞かん方がいいよ」とか最悪なケースになっているのは本当に大げさではなくて、現実です。うちは、臼杵で田舎なのですが、近くの小学校でもそれで学級崩壊になっております。何が原因か、親は学力をつけたいけどつかないのは何が原因かと言ったら、奥を見ればそういう背景が実際にございます。もっと親の中で本当の子育てというのはどうあるべきか、学校の先生方がどうやれば授業が分かりやすいのか、親のあり方とかそういう研修とか、研修だけで皆さんご理解いただけるかは分からないですけれども、何か親育てというところで力を入れるだけでも子どもの学力は上がるのではないかなと最近本当に感じておりまして、今日こう書かせていただきました。

先ほどテーマ1の方で少し時間があればお話ししようかなと思ったのですが、付け加えさせてください。先ほど、富高委員がおっしゃったのですが、うちも児童クラブがありまして同じような状況が多々あります。保育園の方ではもっと厳しいです。先日、シラミの多いお子さんがいらっしゃって、うちの看護師が丁寧にお話をしたら、「先生、シャンプーを買うお金がないよ、月末になればシャンプー買えるけど、先生シャンプーせんでも死なんけど、ご飯食べんと死ぬけん、シャンプーはあと3日待つて」と。シラミも跳ぶのでクラスで蔓延するので、うちの保育園の方で何人かそういう形であたりしたのですが、シャンプーも買えないのが実際です。お米を買ってご飯が食べられればいいけれども、「給食があるけん」で、給食で何とかつなぐような、本当に月末給料前はそういうふうな方が多いのが現実で、それが年々増えております。また、先日、貧困のことを調べようと思ってネットを検索したら、大分県で全国1位がございました。それは何かといいますと、風俗のデリバリーヘルスが全国でナンバーワンだったのです。私は本当にびっくりして、こういうことがあるのかな、福岡とか都会ではなくて大分県なのかと考えたときに、そういえばもう引っ越しをされたのですが、離婚家庭の母子家庭のお母さんが何か行動がおかしいなと思ったら、それに行かれていて。子どもたちを置いて行けないので、そこは4人お子さんいらっしゃったのですが、4人連れてそういう部屋に行って、夜そこに置かしてもらって自分は仕事をして朝方連れて帰って。その子は小学校1年生になって私も時々連絡するのですが、学校に行けていないと。行けるはずがないですよ。朝までそういうところで学校に行くとするのは難しいです。そういうことが不思議だったのですが、大分市であればもっと多くそういう方がいらっしゃるのかな、何とか身をつなぐためにしているのかなというのを感じました。私は大分県の全国1位がここにあるのがとても悲しいというか、お仕事なので、そんなことを言ったらいけないのかもしれないのですが、びっくりいたしましたので、ここでご報告したいと思いますし、だから県にどうしてほしいとかどういいうご提案をしていいのかわかりませんが、今それが現実です。

すみません、SNSのところから話がずれましたけれども、ありがとうございました。

【坂本委員】 僕もびっくりしたのですが、小学生って90%以上がスマホを持っているのです。例えば100人いたらスマホとかインターネットをやったことがない子は2人くらいしかいないという感じでした。その辺もびっくりしまして。一応インターネットで危険性というものがあって、それがすごくあるのは分かっています。ただ、どこかで先に教

育しないと、例えば、教える側が後になってしまうと、子どもたちが先に悪い方を知ってしまう可能性もあるわけです。だから、それとついでに親の教育という面でも、親は子どもに結構知ったようなこと言うのです。「これはうちではダメだ」と、結局自分はやっていないのです。それを例えば子どもに叱ることによって自分も正していくという親もいらっしやるかもしれません。そういうチャンスでもあるかなと思っています。

僕は何でもかんでもネットとかではなく、基本的にはアナログ、外で遊ぶとかが一番だと思います。ただ現状、何にもしていないとどんどん問題が起きてから、教育現場や親が対処していくという、先ほどお母さんたちの SNS の話もありましたけど、昔から僕は見るだけにしていたときからお母さん方はグループをつくって、いろいろあれやこれや言うわけです。それをずっと追及しようとは思わないでしょうけど、1つの情報収集になるという形で流すしかないだろうと思います。学校現場は先生がものすごく忙しいのです。仕事もものすごくあり過ぎて、それで昼休みも子どもたちの面倒を見ていて、その後もまた部活もあり疲弊しています。これは、政府の方も対策を取っていて、長時間労働しないようにという形を取ろうとしていますけど、今現状では人員を増やすとかしない限りはそういうことは解消されないのです。これは何でしないかと言ったら、結局、子どもに対する目配りが行き届かなくなるのです。そしてどうしても、非常に怒り過ぎる先生方も見受けられます。それはどうしても心に余裕がないから、どうしても叱り過ぎてしまう。それが親子であれば、後で解決することがあるかもしれないけど、いち教師がいち生徒を叱り過ぎたと、そうしたら、その子がそれから来なくなったということもあるわけです。だから、いろいろな意味で関連していくのかもしれませんが、実際県の政策を見ていたら、事務員さんとか公務員さんのフォローなど、言うなれば公務の部分の先生方も減らすという方向でたぶん思われていると思うので、それは非常に賛成です。どれだけその人たちがカバーできるかというのも正直あるのですけれども、それをすべて目指すにあたってどうしてもこの ICT の導入というのが不可欠であると思うし、その中に子どもたちも当然入ってくるわけですから、何らかの形で、そんなに急いだりしませんけれど、何かルールをつくって子どもたちにも教えていく。僕は高校の非常勤をしていて、高校くらいになると女の子なんかは全然興味がないと教師の言うことを聞かないです。けれども、小学校、中学校は普段から先生が教育しているから非常によく言うことを聞きます。「これはやったらだめです」と言ったら大体の子はやりません。「これは見たらだめですよ」と言ったら大体の子は守り

ますので、一応、そういうふうなところを信じて、ある程度導入していったらいいのではないかという考えです。すみません。話がのらりくらりとしてしまいました。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。戻りまして、今お2人から出ました、保護者間の情報共有がLINEで行われていて、それ自体が連絡網になっているということでしたので、学校現場で保護者への連絡というのがどのように留意されているのかというのが、もしお話しただければ。

【河野 教育改革・企画課総務企画監】 教育改革・企画課総務企画監の河野でございます。よろしくお願いたします。連絡体制でSNS等を使っているのかどうかというのは、学校によって電話であるとか、あるいはSNSを使っているのかというのは定かではないのですが、SNS等のインターネット、スマホのトラブル防止についての県教育委員会の対応としましては、授業で進めているところです。いわゆるネットトラブルに生徒が巻き込まれないための基礎知識の習得であるとか、あるいはネット利用者として守るべきモラルの知識を向上させるという、この2つのことを目的として出前授業等を行っています。小学校あるいは中学校・高校、それから特別支援学校の児童生徒、それから保護者、教職員、こういった方々を対象にしております、その中にはSNSのLINEを狙いとしていまして、一緒に児童生徒、教職員、学校、保護者が共通の理解をしながら、ネットトラブルに巻き込まれないための知識であるとか、それからモラル、知識をどういうふうに生かすのかといったような出前授業をやっていってございます。今後は、まずは児童生徒がそういったネットトラブルに巻き込まれないということを第一に考えながら情報社会の知識を増やしてもらいたいというふうに考えております。以上でございます。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。引き続き、ネットのことでも結構ですし、その他のことでも結構でございます。ご意見はございますでしょうか。

【篠原委員】 社会保険労務士の篠原です。よろしくお願いたします。仕事柄いろんな産業の経営者の方から相談を寄せられるのですが、お子さんに本当に多いのが採用のことに関してです。ご承知のように、大分県内の求人倍率が1.4を超えています。ハローワーク宇佐管轄で1.95を超えているという非常事態の中で、働いてくれる人がいなくなるので、会社をたたまなければならないという地方の中小零細企業が増えていくというのは、今後加速していくのではないかなと危惧をしております。それで、「どういう方を採用したいですか」と経営者の方に聞くと、大体コミュニケーション能力がある方、そして主体性を持っている方というのがトップ2です。経団連の調査でもこのトップ2が一緒でしたから、

たぶんその辺り外れてないかなというふうに思いますが、コミュニケーション能力という概念が広すぎて、取り方はさまざまあると思いますけれど、主体性という面でいうと、私は教育とか仕組みとかで何とかなることだというふうに思っています。偉そうにそういう所で研修をしています、私自身もどうすれば主体的に効率よく働けるかなということあまり考えたことがなく働いてきました。とにかく片っ端から仕事をして終わったときには帰るべきという体力任せな仕事の進め方をずっとしてきたのです。実際はあまり学校現場で習ったことがなかったと思っている中で、プランの中にもありますけれども、子どもが挑戦し自己実現をできるようにというふうに目指す姿が掲げられているわけであって、そのためには何ができるのかな、というふうに親の立場として、今8歳の子どもがいるのですけれども、子どもを実験にして、冬休みの宿題を12月中に終わらせるためにはどうしようか、お父さんと一緒に考えてみようか、とやったりしています。結局何が大事なのかなという、自立的というか主体性をつくるというのは、ここだけでなくよく言われていますが、ライフデザインがものすごく大事です。ライフデザインがちゃんと明確であって、目指す目標とかアクションプランをつくって実際それを実行できている人が大人の世界で一体どれぐらいいるのかという、現状としてはほとんどいないのです。そう言われている中で、もうちょっと幼少期のところから教育が必要かなというふうに思うのです。先ほど岡田委員が言われていましたけれど、学校現場の労働環境って本当に過酷で、そんな中で県の30年度の取組の中では「働き方改革の研修会の実施」というのが取り入れられていて非常にいい傾向かなというふうに思うのですが、要望としては、これがずれたような研修会にならないような取組を希望して、幸せで豊かで月曜日の朝が待ち遠しくてしょうがないみたいな状況になればもっともっと質が向上できるんじゃないかなと思っています。以上、意見です。

【岡田副会長】 今、篠原委員に向けられたので心を強くして付け足しをしようと思うのですが、今、中学高校辺りの生徒はそれぞれ結構頑張っている環境にいると思うのですが、「次の中間試験のためにこれだけ勉強しなさい」とか宿題がたくさん出されるとか受け身でやらされて完璧な目標に向けてベルトコンベアに無理やり乗せたみたいな、そんなところがあるように思っています。そのことでいうと、なかなか主体性、自分で考えて自分でスケジュール管理しながら、やりたいことを継続してやってみたいな経験を持ってないかなとは思っているので、この辺りで言うともう少し長期的な展望で、こういう勉強をしてこんな力をつけた結果としてこの職につきたいとか、カッコいいお母さんになりたいとか、

こんな趣味をずっと持ちたいとか明確なビジョンを持てるような、いろんな刺激をもらえるような子ども時代であってほしいなというふうに思います。

そのために、実は小学校のころは子ども会なんかで地域の人との接する機会も少しはあるのですが、中学高校と進むとだんだんと親と教師しか大人と関わっていない子どもというのが多い気がするのです。ですから、地元の地域にこんなカッコいい職業人がいる。こんなすごい親父がいる、みたいなのを見せる機会をもっと増やして、そういうふうな魅力的な人が自分の地域で活動しているということになると、「大分ですっと暮らしたいな」ということも増えてくるのではないかなと思うので、その辺り、そういうところに価値観を持てるライフデザイン教育を大分でできるといいなというふうに期待しているところです。以上です。

【糸長委員】 自治会の糸永です。今、テーマ2のところ、要するに子どもに生きる力をどのように育ませるか、ということですが、岡田先生と私いろんな委員会で一昨日も一緒になったのですが、今のお話もそうですが、さすが大分大学の教授だけのことはあるなと思って聞いておりました。それは、理想論が非常にうまい。今のも理想ですよ。私たちは自治会代表で今年からこの会に入るようになったそうですが、今、岡田先生がおっしゃる、地域で中学高校は大きくなるほど地域離れするぞと。接触するのは親と先生だけだと。大きくなったら、中学高校生なんて親ともあまり接触しません。そして自立していきます。だからわれわれが子どもの時でも、自分で自主的に勉強したくはありません。遊びたいですよ。だから、理想の形はお互い理解して、そう思っていきたいものだと思いますが、実際はやはり押しつける、あるいは記憶させる、あるいは一定の枠にはめるというような部分もなければ、なかなか子どもは育ちません。生きる力も私は身につかないと思います。ですから今、岡田先生がおっしゃったように理想はこうだということをお互いがよく認識しながら、小学校、幼稚園、中学の前くらいまでは地域のお祭りなんかも参加してきます。子どもたちの地域運営のいろいろな行事もうまくいきます。中学の後半になったら来ません。時間的に来られないのです。高校生になると全く来ません。それを地域で接触するようにいろんな努力はしてみるけれども、結果的にはうまくいっておりません。連合自治会6年目に入っておりますが、その間いろんな努力をしてきたけれども、結論としてはうまくいかない。今の面は、すべて失敗のくり返し。しかし一方で、努力はしていかなければいけないと思っております。そういう意味で難しい問題です。

それから、ここのテーマ2で、県の教育委員会の「子どもに生きる力を与える」という

一番の根幹のところ。長い表現はいりませんので、一言、二言で言ったら県教育委員会がどういう考えで、これを現場の学校なりに指導しておられるか、あるいは公民館活動とか社会教育の面で子どもに生きる力をどういう観点で与えるようにしているのか。私も以前県立高校の校長をして、佐伯にある市立の校長をして佐伯に12年も通いました。そういう経験はあるのですが、文部省の打ち出しておる子どもの生きる力という言い方は近ごろないではないですか。そういう文言が消えたではないですか。ゆとり教育、その後はいくつかある柱の1つが近ごろ消えた。それをあえて県がこの面で取り上げるのはどういう意味があるのかということもお聞きしたいところがあります。

それと、資料の3ページに平成30年度一般会計当初予算案が出ている行政説明で、今年の新規は丸で書いてあるけれども、知事さんのおっしゃる「子育て満足度日本一の実現」という予算の中で、日本一になるかどうか分かりませんが、限りなく日本一に満足度が近づいているというのは、予算のこの中を見るとどれとどれか教えてください。いくつかあると思う。それと関連して、県だけが一所懸命やってもうまくいきません。「高齢者の健康寿命日本一」と知事さんのおっしゃる、今のところ8番とか10番とかありますね。

【広瀬知事】 16番と10番です。

【糸永委員】 それをこの前聞いて、帰って公民館で高齢者が集まるときにその話をしたのです。「県も一生懸命やるから」と言ったら何人からか「県が一生懸命やると言っても、実は俺たちが頑張らなきゃならないのではないかと。まさにその考えで、県がリードしていくこの予算の中で、県内の市でそれを受けて「県は良いことをやるぞ」「市もやるぞ」と力を上げて予算措置などをした、あるいは、今年しそうだというところの、モデルになりそうな市がいくつかあれば教えてください。よろしくお願いします。以上です。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。それでは事務局の方。

【宗岡課長】 教育委員会では、一言で言うならば、子どもたち一人一人が他者と対話をし、協働しながらより良い方向を目指す資質、つまり思考力、判断力、表現力、自分で考え判断し決定するとその力を伸ばしていくということが、これから多様な社会で生きる子どもたちにとって一番の力だということでのいろんな活動をスタートしているということです。

【長谷尾部長】 日本一でございますが、かなりレベルを上げていて、資料1の3ページの上から2番目「不妊治療費助成」、これはトップクラスと言えらと思います。力を入れております。それと「子ども医療費の助成」、5番でございます。これは全国水準に比べます

と高レベルでございます。もう1つは、病児・病後児保育に関しては次のページの11番。それから先ほど少し知事からお話ございました放課後児童クラブの関係で16番、これはほぼフル装備になっています。いろんな面があるのですが、例えば、夏休み等は民間施設を使ってこれは支援を広めたいと思っておりますので、大きく取り上げていこうと思います。それと先ほどからお話が出ている児童養護施設、どちらかというとも里親の関係になると思いますけれども、5ページの一番上20番それを実は里親率というのは全国のベスト5に入っております。

【糸永委員】 これはこんな少ない予算で満足ですか。

【長谷尾部長】 これは別に児童措置費があります。ここでやっているのは、そういった里親をどんどん増やしていきましようというリクルートの部分です。あとは聴覚障がいなどにもかなり力を入れていまして、ここに出ているものの中でも結構ハイレベルなものがございます。以上でございます。

【広瀬知事】 大部分が市町村と一緒にやっていますから、例えば不妊治療なども県が出し、市が出し、そして国からお金を受けて助成しますから市町村が全部連携しています。

【糸永委員】 大分市が一番熱心ですか。

【長谷尾部長】 全市町村と協調体制を取らないと、全県の施策が打てませんので、これは私どももいつも各市町村とご相談しながら進めてまいっております。

【糸永委員】 ありがとうございます

【藤内課長】 健康づくり支援課長の藤内と申します。健康寿命日本一について地域で話題にさせていただいてありがとうございます。今ご質問にあった、市町村がどういう取組をしているかということですが、平成28年度に約2万人の県民に生活習慣の調査をさせていただいて、県内18市町村ごとに保健構築の課題というのが見えてまいりました。例えば佐伯市であれば検診の受診率が低いということが分かりましたので、佐伯市ではターゲットを決めて、年度ごとにこの年齢層に検診を促すというような取組をしています。塩分摂取が多かった大野町は、おいしく減塩、うま塩で減塩しようなど、それぞれ保健所と一緒に市町村ごとにそういう取組をさせていただいています。何とか地域の皆さんと一緒に取り組んでいただいて、健康寿命日本一を早く実現できればと思っております。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。よろしいですか。時間ももう、迫ってまいりましたので、最後に、ちょっといい交流をなさっているとご意見の中にも書いていただいている、「おおいたパパくらぶ」の幸野委員に活動の紹介だけでもしていただけますでしょうか。

【幸野委員】 公募委員の「おおいたパパくらぶ」の幸野と申します。10 ページに1つ、私の方の意見を書いておりますけれども、私の娘が通う小学校では、定期的に支援学校の生徒さんと一緒に遊んだり交流を持ったりする機会を設けています。これが、私の娘の学校だけがやっているのか、他の学校さんでもやっているのかちょっと分からなかったのですが、非常に、この機会というのは貴重な時間になっていると思います。私の娘はそういった支援学校さんの件もあるのでありますが、バリアフリーや盲導犬、そういった体の不自由な方も学校に来られて講演する等、この間は盲導犬を実際に連れて来て、みんなと触れ合って盲導犬の話をしたと言っておりました。ですので、町で歩いていても非常にバリアフリーに興味があって、「あ、ここの階段はまだバリアフリーになっていないな」とか、点字ブロックがあったら見つけて「ここはなってるね」とか、そういった、町を歩いていて、僕がびっくりするような気づきをしてくれます。それからやはり支援学校の生徒さんたちと一緒に遊ぶことが多いみたいなので、そういった偏見のようなものが非常に少ないような気がします。私などは小さいころは、やはり周りに障がいのある方というのがなかなかいなかったもので、実際そうやって触れ合った際にどうしていいか分からなくて、うまく接し方が分からなかったところがあるのですが、非常に寛容な心というか、配慮するような気持ちが育っているように思います。こういった取組は、もしうちの学校だけであるのであれば、いろいろな学校さんにも広げていただいて、本人たちもすごく楽しいらしいのです。もちろん支援学校の生徒さんたちもよい刺激になると思いますし、楽しいと思いますので、これはぜひやっていただきたいと思います。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。それでは、終了時間も近づいてまいりましたけれども、今のことにつきまして事務局、何かございますでしょうか。

【後藤課長】 特別支援教育課の後藤といいます。交流及び共同学習と言って、文部科学省がそういう呼び方をするのでありますが、おっしゃったように、学校同士で支援学校の小学部が小学校に行くという「学校間交流」という形態と、支援学校にいる子どもさんが住んでいる地域の小学校や中学校に1人ずつ行くという、「居住地校交流」という2つの形態があります。先ほどおっしゃった、おそらく学校間交流だと思うのですが、特別支援学校は17校しか県内にはございませんので、なかなか受け手が17校しかないというところで苦しい部分ではあるのですが、学校間交流をしていただいている小学校は36校もあります。ですから、特別支援学校1校が小学校2校と交流したり、3校と交流したり、ということをやっているような実情です。

そして、居住地校交流といって、個人でお出かけになっている生徒さんたちは、小学部では70校あります。70人の子どもたちが地域の小学校へ出かけて行って、その日1日一緒に授業を受けるというようなことをしています。中学校は、学校間交流をしていただいている中学校は27校です。中学生で居住地校交流に出かけている生徒さんは23名。高等学校では学校間交流が20校、居住地校交流として、高校に出ている生徒さんは3名という形になっています。学年が進むとどうしてもどの授業の時間帯に入ろうかなということが難しい、障がいがあるのでなかなか難しいものがあるって数が減ってはきていますけれども、先ほどおっしゃったように、障がいがあるということよりも、自然に1人の人と人として触れ合えるということが、特に年齢が低い方ほど受け入れやすくて、こういうふうなことをどんどん進めていきたいなと思っています。そのことが、社会にうちの子どもたちが出ても、自然に受け入れていただけるような社会になるのではないのかなというふうに考えています。以上です。

【仲嶺会長】 ありがとうございます。それでは終了時間が近づいてまいりましたので、これで議事を終了いたしたいと思います。議事進行につきましては、事務局にお渡しいたします。

【稲垣主査】 委員の皆さま、ご意見、ご提案ありがとうございました。ここで最後に知事からコメントをお願いします。

【広瀬知事】 今回も、熱心なご議論をいただきましてありがとうございました。大変勉強になりました。いくつか、また議論を深めていきたいのですが、第1の「きめ細かな対応が必要な子どもと親に対する対応」という件でございますけれども、おかげさまで、いろいろ工夫をしていただいて、最近、子ども食堂とかフードバンクが増えてまいりまして、これはこれで1つよかったなと思っているのですが、それにつきまして、私も同じような疑問を持っていたのですが、子ども食堂というのを富高さんでしたね、今後どういうふうに考えているのかということについてご質問がありまして。これはそのとおり、大変大事な問題提起だと思って聞かせていただいたのですが、実はそれに関連しまして、もう数年前になりますけれども、別府で、虐待で残念ながら亡くなったお子さんがいました。あの時にわれわれが、今後同じようなことが起きないためにどうしたらよいかという話をしまして、その時にやはり、その家庭に対して、児童相談所、あるいはまた生活保護課、あるいはまた民生委員、警察、いろいろな人がそれぞれバラバラに「何かおかしいな」と心配はしていたのだけれども、結局その横の連絡が悪くて、そう

いうふうな悲劇になったということがありまして。そのこのところの連携をきちんと取って、しかも連携も取れ、いろいろ対応を取れるようにしておくということが大事ではないかということで、あの時以来その関係者が集まって、確か連絡協議会みたいなのをつくって定期的に連携を取り合うということをやっているのですけれども。

そういう連携を取る中で、やはりいろいろな救済手段が必要になるということで、先ほどの生活保護の問題もあるでしょうし、それから児童相談所の対応もあるでしょうし、それから発達支援センターみたいな対応もあるでしょうし。子どもと親への対応ということで、先ほどは内田民生児童委員の方からお話がありましたように、本当にいろいろな対応があった方が、子どもの救済にはいいのかなということで、そのような意味で、子ども食堂というのはやはり大事な役割を果たしているのかなと思うのですけれども。しかし実際のところ、そういうことで今機能して、大変ありがたいと思っているのですけれども、先ほど神田委員からのお話にありましたように、子どものシャンプーの問題とか、デリバリーヘルスの問題とか、非常にショッキングなお話がありまして、やはり、貧困そのものをもう少し狙い撃ちして対応していくということが非常に大事なのだなという感じがいたしました。地方でできることは限られていますけれども、そのこのところの貧困対策をもっと効き目があるようにやっていくということは非常に大事だし、またそのために、先ほど、最近ようやく有効求人倍率が非常に高くなったとお話がありまして。求人がものすごく増えてきたということもあるので、職業能力の向上を与えながら、所得の高い仕事ができるようにしていくというようなことが大変大事なことなのかなと、こう思っております。今の景気を、少しずつプラスにさせて、貧困対策等もやっていくということ。そして貧困がなくなって、とにかく子ども食堂が必要なくなるというのが一番大事なことなのでも、なかなかそこにはいかないものですから、先ほどのように問題が起こったときに初期の救済をして、ああいう形でいったのはわれわれとしては大変ありがたいなと今思っているところでもあります。

それからもう1つ、これも大変大事なご議論をいただきました。「子どもの生きる力をはぐくむ教育」のところ、これも坂本委員から、「インターネット社会なのだから、そのこのところをもう少し積極的に取り入れた方がいいのではないか」ということ、それから、それに対して中村委員、あるいは賀来委員から、「それは心配だ」と。「むしろ反対だ」というお話がありまして、どちらも大変大事なことだと思って伺わせていただいたのですけれども、これまではどちらかと言うとわれわれは、むしろネット社会で、今進んでいるの

だけれども、フィルターをかけるなり何なりして、子どもたちから有害なネット情報を隔離しようということをしてきたと思うのですけれども。今や、インターネット社会がどんどん進んで、先ほどもお話がありましたように、90%以上の方が、本当に小学生がスマホを持っているというような社会になってくると、その今までのやり方ばかりでやっていいのかどうかというところが、本当はもう少し考えておかないと一大事になる可能性があるのではないかと心配もするのです。特に先ほどの保護者の方々のインターネット通信のやり取り等というのもやりすぎであるということで、本当になかなかこれは大変な問題かなというふうに思いますし、むしろこういうインターネット社会を前提にして、インターネット社会の礼儀作法みたいなものを教える方が大事なのかなという気もしますし、この辺りはもう少し議論をしていかなければいけないなと思っているところでございます。また、引き続きよろしくご指導のほどお願いします。

それからもう1つ岡田先生や糸永委員からのお話がありましたように、それから篠原委員のお話にもありましたけれども、「ライフデザインをどういうふうに考えるか」、つまり生きる力というのを、受動的ではなくて積極的に自分で考え、自分で道を切り開いていく力というふうに考えると、そここのところの力をどうやって養うのかなかなか難しいという糸永委員のご心配もあったわけですが、実は、「沖縄少年の船」というものを毎夏、税金を使わせていただいてやっています。4泊5日でクルーズ船を借りまして、500人の小学生、これは小学校の5年生と6年生ですが、それに子どもは25班ぐらいに分けますから、その班ごとに班長さんに高校生、それからその高校生の下に2人の副班長、これは中学生です。そういう人が引っ張って、そしてその上に大人の指導者、リーダーが乗っかって、とにかく4泊5日で沖縄まで行って。船の中で本当に他にいないので仲間だけで生活をするわけですが、この中で、1回と言いますか、1日1晩、高校生と私どもとの間で懇談をする機会がいつもあるのですけれども、その時に、その高校生というのは小学生の時にメンバーとしてこれに入った子が、今度は中学生の時に班長を手伝ったりして、とにかくそういう共同生活を一緒にやってきた子がいるのですけれども、非常に自覚を持って、「自分は高校生だけれども、将来こういうことをやるんだ」ということを非常に明確に、さまざまな展望を持ちながらやっているという感じがしました。やはりいろいろな先輩と交わる、大人と交わる、自分も汗をかいてボランティアをやる、というようなことでやってみると、何となく自分の人間が磨かれて、意識が立派になってくるのかなというふうに思いました。

先ほど小学校と支援学校の交流のお話がありましたけれども、あれもそういう中で自分自身を見つめ直す機会があったのではないかなと思いますし、環境教育も各学校でやっていますけれども、この環境教育をやりますと、子どもたちがお父さんお母さんと一緒に歩いていて、お父さんがタバコをポイ捨てしたりすると、ちゃんと親に注意をするぐらいの意識を持ってくれる、ということも聞きますし、そういった意味で、やはり親子あるいは近所の先輩後輩、いろいろな1つの社会的に交わりながら教育をしていくと、何か自覚を持ってやってくれるかなという感じがいたしました。いろいろなやり方があるかもしれませんが、やはり生きる力の元となる自覚と責任とそれから自分なりのいわゆる計画的な目標といったようなものを、どうやってつけていかせるかというところは非常に大事なところかなというのは、皆さんのお話を伺いながら感じた次第です。今日は大変貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

【稲垣主査】 委員の皆さまにおかれましては、長時間にわたるご議論、また貴重なご意見を賜りまして、誠にありがとうございました。

次回の県民会議の日程でございますが、7月に開催を予定しております。また、時期が近くなりましたら、詳細につきましてご案内をさせていただきます。よろしくお願いいたします。以上を持ちまして、「平成29年度第3回おおいた子ども・子育て応援県民会議」を終了いたします。本日は、どうもありがとうございました。